

「待ったなし」になってきた

全国小中学校環境教育研究会 会長
東京都品川区立大井第一小学校 校長

藤森克彦

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で開催が危ぶまれていましたが、関係の皆様方のご支援ご助言をいただき、第52回全国小中学校環境教育研究大会（東京大会）をオンラインにて開催できますこと、大変うれしく思います。特に今回は、コロナ禍にもかかわらず研究紀要の誌上ではありますが、7校の小中学校に先進的な実践を紹介いただき大会に花を添えることができました。感謝申し上げます

さて、今年度10月、中教審初等中等教育分科会は、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～をタイトルとした審議の中間まとめを公表しました。その中に、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」として次のように示されています。（一部抜粋）

○子供たちの多様化、教師の長時間勤務による疲弊、情報化の加速度的な進展、少子高齢化・人口減少、感染症等の直面する課題を乗り越え、Society5.0時代を見据え、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

○これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、学校ならではの協働的な学び合いや、地域の方々をはじめ多様な他者と協働して主体的に実社会に関わる課題を解決しようとする探究的な学び、様々な体験活動などを通じ、持続可能な社会の創り手として必要な資

質・能力を育成する「協働的な学び」も重要である。その際、「協働的な学び」においては、集団の学習効率化に重きを置きすぎるおそれもあるが、むしろ集団の中で児童生徒一人一人のよい点や可能性をいかに生かしていくかを考えていくことが大切である。

この審議の内容を見ると、本研究会が「持続可能な社会づくりに貢献できる人材」を育成するために必要な資質・能力、態度を身に付ける学習方法について研究し普及啓発を進めてきた方向性と相通じるものです。全国大会で紹介してきた実践の多くは、身近な環境をよりよくするための問題解決的な活動を通して、子供たち同士が協働して解決を図る授業提案であり、我々が行ってきた方向性は一定の評価を得ているものと思います。

ところで、去年は、環境省の総合環境政策として「2050年に二酸化炭素実質排出ゼロを目指すゼロカーボンシティ」としてより実効性のある取り組みが求められました。また国連が定めたSDGsの期限は2030年でもうあと10年しかありません。最近では、コロナ禍の影響を回復する方向性として「グリーンリカバリー日本版」の議論も聞かれます。意図的に危機感をあおることは問題ですが、まだ先のことだからといって先送りしている状況でないことは明らかです。今の子供たちは今の平均寿命から考えれば、多くが2100年を迎えることとなります。80年先を見据えるのはずいぶん遠過ぎる話ですが、将来の世代のためにも未来からしっかり逆算して教育していかなければなりません。「いつやるか？いまでしょ！」というのは、まさに教育に携わる我々に突き付けられていると思います。

各支部の活動報告

北海道・東北支部報告 1

「ESD/SDGs」と学力向上について

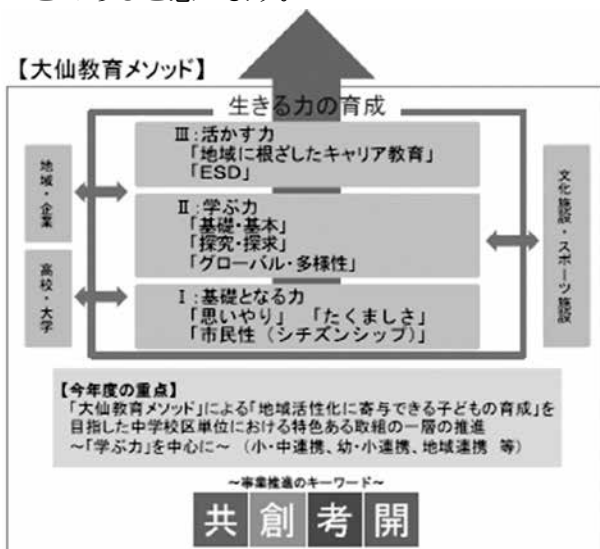
秋田県大仙市教育委員会
教育指導部次長兼教育指導課長
東北地区支部長 島田 智

今年度、「ESD/ユネスコスクール東北コンソーシアム 第2回学びあいセミナー」において標記の発表をする機会をいただきました。その概要を紹介します。

秋田県の学校教育共通実践課題として、「ふるさと教育の推進」があります。「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指しています。キーワードは「人づくり」です。最重点課題として挙げられている一つは、「問いを発する子どもの育成」です。特に授業では、「秋田の探究型授業」として、基本プロセスを示し、それを機能させた授業づくりを、どの教科でも行っています。



それらを踏まえ、「大仙市教育メソッド」でも強く意識しているのが「探究・探求」です。これはESDの視点を踏まえた授業づくりでも重要なことであると思います。



私たちが取り組まなければならないことは、SDGsを実現する「人づくり」であると思います。持続可能な社会の担い手として必要な資質・能力を、探究型の授業によって実現していくことが、ESDの大きな使命ではないでしょうか。

北海道・東北支部報告 2

SDGsを意識したESDの教育の在り方

宮城県気仙沼市立鹿折小学校 校長 菅原 理恵

東日本大震災から10年の節目を迎え、ようやくここ気仙沼市の復興も目に見える形となってきた今年、新型コロナウイルス感染症という新たな「災害」に直面し、改めて学校教育の在り方やその中で取り組まれるSDGs達成の鍵となるESDの視点をもった教育の在り方を立ち止まって考えた1年となった。

本校では、今年度から文部科学省より海洋教育に特化した、教育課程特例校の指定を受けて総合的な学習の時間や理科、国語、社会を教科横断させた「海と生きる探究活動」として新たな領域とし、研究をスタートさせた。

1年目の今年は、各学年のデザインシートを再整備し、年間指導計画を作成することと、児童に自ら「問い」をもたせながら探究的な活動をどのように行っていくか探ることを目標に取り組んできた。

コロナ禍の中、計画の変更や再考を余儀なくされたが、3年生は鹿折地区の豊かな自然、特に海と関わる伝統文化、4年生は鹿折川の環境調査、5年生は気仙沼市の自然、主に海と関わる産業、6年生は気仙沼市の海とともに生きるまちづくりを大きなテーマにして、それぞれの探究課題を設定し、学習を進めた。「新しい生活様式」を踏まえ、オンラインを活用しながらゲストティーチャーの講話や校外学習等、体験的な活動を通して児童一人一人が探究課題に沿って追究する学習を行うことができた。

この「海と生きる探究活動」に取り組み、地域の水産業や環境問題に取り組む方々や、大学教員の専門的で科学的な話を伺ううちに、コロナ禍も相まって子供たちは地球環境の問題が身近な環境の問題として自分たちの生活を脅かし始め、その原因が自分たちの生活の中にあることに気づき、「自分の事」として考え始めるようになった。

今、子供たちは、「身近なSDGs」として、九州豪雨災害の募金、落ち葉掃きと堆肥作り、書き損じ葉書の収集、あいさつ運動、家庭科学習でのSDGs等々、授業の外でも「今自分ができることを少しずつ」行動している。

新型コロナウイルス感染症は、未だ終息の見込みがたっていないが、これを機会にSDGsを意識したESDの教育の在り方をもう一度考え、この学習を深化させていきたい。

コロナ禍での環境教育をいかに進めるか

東京都小中学校 環境教育研究会
千葉県富里市立富里南小学校 校長 古谷 成司

令和元年11月22日に、富里市立根木名小学校で開催された「第51回全国小中学校環境教育研究大会（千葉大会）」の公開授業において、生き物等身近な自然環境に直接的に働きかける環境教育の実践を行い、多くの成果をあげることができました。

しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、環境教育研究部の支会長会や各支会の活動の多くがストップしてしまい、せっかくの根木名小の研究成果を県全体に広めていくことが実質的に難しい状況にあります。

そのため今年度は事務局から広報誌によってコロナ禍だからこそ必要な環境教育の実践に関する発信を行いました。

コロナ禍の状況で子どもたちの活動が制限され、ともすると教育内容を詰め込みになりがちです。そこで、外部団体や企業が行っている環境教育の出前授業により、いつもと違う授業に触れることで子どもたちが意欲的になり、環境教育に関心が高まればと考えました。

一例として、千葉県魅力ある建設事業推進協議会が護岸工事を題材にした土木業を紹介する「川とくらしを守る仕事」について出張授業を富里南小学校において実施しました。5年「流れる水のたらし」の学習において、川岸を水の流れることによって削ってしまうことを防ぐために、コンクリートで護岸を守るのではなく、建設業の方々により生き物が生息できるように護岸を守る仕組みを構築していることを学びました。子どもたちは当授業から自然とどのように共生を図ればよいのかを気づくことができ、環境の保全に対する意識が高まりました。

こういう状況だからこそ、外部が提供している環境教育プログラムに積極的に取り組み、人間がよりよい環境を構築するために努力している姿に触れさせることが必要だと考えます。

コロナ禍の研究会活動

東京都小中学校 環境教育研究会長
東京都多摩市立連光寺小学校 校長 棚橋 乾

東京支部では、例年と同様に研修会の企画運営、授業研究、研究成果の普及啓発を進めている。今年度はコロナ禍の影響で研究活動や研修会の実施が十分行えない状況である。授業研究については、エコな生活や意識について児童生徒の意識調査をもとに授業の計画を行い、研究員の管区校で実践した。詳しくは後頁をご参照いただきたい。

1) 第56回東京都小中学校環境教育研究発表会は第52回全国小中学校環境教育大会と合わせて実施予定である。当初は東京大会として都内品川区立大井第一小学校を会場として実施予定であったが、コロナ禍の状況悪化によってオンライン開催となった。研究会にとっては初めてのネット上での大会となるため、できるだけコンパクトな大会運営を目指した。また、ご講演には元NHKクローズアップ現代キャスターで国連食糧農業計画（FAO）日本担当親善大使でいらっしゃる国谷裕子様をお願いしている。国谷様は子供向けのSDGs本を執筆されるなど、SDGsの普及にご尽力されている。ESD実践とSDGsの関係性を理解する上でも貴重なお話が伺えると期待している。

2) 研修会
10月31日（土）高尾山を会場に自然観察会を実施した。

参加者人数を絞っての実施となった。講師には、写真家であり林野庁の森林保護員で高尾山周辺の管理を行っていらっしゃる宮入芳雄先生をお迎えした。17名の参加者と共に登山コースの4号路を頂上に向けて回り、高尾山の環境と植物の特徴について学んだ。

高尾山の標高は599メートルで、樹齢数百年の大杉をはじめ、動植物や昆虫も数千種類も生息している。特に、北と南での植生の違いに参加者一同驚いた。北斜面が冷温帯となっており落葉広葉樹、南斜面が暖温帯となっており常緑樹が生息している。さらに、その北と南を分ける中間温帯林の境界もあり、その場所に立って観察することができた。

また、高尾山で最初に発見されたというタカオヒゴタイという花は、葉がヴァイオリンに似た形をしている。「珍しい花は競争力が弱いので、守ってあげる必要がある」と、タカオヒゴタイを守るために、その周りの草木を管理しているとのことだった。

「SDGs」を視点とした学習の再統合

埼玉県越谷市立大袋東小学校 校長 中台 正弘

本校では、長年にわたる環境教育の実践の蓄積を基盤として、平成24年度から「自然・人・物との関わりを生かしたESD」を推進してきた。今年度は、学習指導要領全面実施を受け、カリキュラム・マネジメントにSDGsの視点を取り入れた新しい教育課程への移行を進める予定であったところ、新型コロナウイルス感染症をめぐる諸状況の中、教育計画の全面的な見直しを余儀なくされることとなった。しかしながら、本校ではこれも一つの機会ととらえ、「新しい学校生活」と両立する形で再構築することとした。

SDGsを学習の再統合の視点として位置づけるにあたり、17のゴールを以下4つのカテゴリーにまとめ、大きなくりの中で学習活動との関連を考えた。

- 「私たちの生活」(ゴール①②③④⑤⑥)
- 「これからの社会」(ゴール⑦⑧⑨⑩)
- 「環境を守る」(ゴール⑫⑬⑭⑮)
- 「私たちにもできる」(ゴール⑩⑯⑰)

この中で、「私たちにもできる」について、学習内容のみならず学習方法や態度形成の要素も含めている点が本校の特色である。先行研究では、学習方法＝「スキル」にあたる部分は、学習内容＝「コンテンツ」に対して基盤のように位置づける例が多いように思われる。これに対し、本校ではコンテンツとスキルを一体のものとしてとらえ、併せてこのことを「主体的、対話的で深い学び」を展開する視点として位置づけている。さらには、「私たちにもできる」の部分は教育課程以外の学校の職務(管理・事務・保健・校務等)にも及ぶものであることから、学校運営全体をSDGsの考え方の中に落とし込むことができる。

具体的な実践は、今後、一部の学年および単元から試行的に積み重ねていくこととなるが、子どもたちに「今、自分たちが学んでいることは、世界のこんな動きにつながっていくんだ」という大きな展望をもたせることが、変化の激しい社会を生き抜いていく力に結びつくものと考えている。

◆6年生がこれまでのESDの取り組みを5年生に伝える



「支え合う子どもたち」

～コロナ禍でのSDGs～

神奈川県環境教育研究会 会長

神奈川県横浜市立日枝小学校 校長 住田 昌治

1. 研究のねらい

コロナ禍においてSDGs/ESDを進めるために、教育課程の再方向付けを行った。そこで問題になったことは、これまでのように「人」や「こと」と繋がり合いながら進めることができないということだ。そのような状態の中で何ができるか考えながら教育活動を進める必要があった。考えられることは「もの」に関わる、「もの」づくりを通して「人」や「こと」について学ぶことになった。

2. 研究内容(例)

①日枝っ子アクアパラダイスをつくろう

日枝小学校の近くの川にアクアパークという場所がある。そこに生息している魚やエビ、ヤドカリ等を捕獲して



きて、教室の水槽で飼い、全校のみんなが触れ合えるようにする2年生の実践である。コロナ禍で元気がない全校の仲間を笑顔にしようというプロジェクトだ。難しいのは、アクアパークは汽水域で塩分濃度を一定にしないと飼えないことだ。子どもたちは、それを理解し、各自が塩分濃度を調整しながら飼っている。

②他の「もの」づくり

身近なものに目を向けた実践が多く、「校庭の樹木の葉を使った染め物」「古着を使ったエコバック」「動く絵本作り」「オリジナル校庭遊具をデザイン」等々、子ども同士がエンパ



ワーしあうような内容になってきた。

3. 課題

コロナ禍が続く中、全員一律の取組は難しくなった、個の学びと集団の学びを統合的に扱う必要がある。今後も、しっかりつながりを意識した教育活動を展開していきたい。

～今年度の取り組み～

北陸・近畿支部 兵庫県会長
兵庫県尼崎市立成良中学校 校長 鎌田 基

今年度兵庫県は、コロナ渦で6月より学校を再開し、分散登校を経て通常登校に戻りました。授業時数の確保を優先し、多くの学校行事を中止や延期、縮小の対応を取らざる得ない状況となり、本校においても当初の環境教育の計画が形を変えての実施が手一杯の状況となりました。その中で、本校のあまっ子Farm部の取組を報告させていただきます。

今年度、関西国際大学の傍島教授より「地域伝統野菜活用プロジェクト」のお話を頂き、ちょうど尼イモの栽培に取り組んでいたことから、本校も参加させて頂くことになる。

・8月3日(月)観光マーケティング論研修



尼崎市のヒット商品のアイデアを考えようと言うことで、マーケティング論や商品のネーミングについて研修した。

・9月5日(土)商品アイデアのプレゼン

あまっ子Farm部や家族、友人とで考えた商品アイデアのプレゼンを実施し、16点の中から3点に絞った。・尼イモプリン・シャチイモ焼き・尼イモコロケである。

・10月24.25日(土日)尼イモ商品開発PR



阪神尼崎駅北側広場とあまがさき観光案内所で大学生と共に試作品のお披露目や価格設定や購入層調査など市場調査を実施した。

・11月20日(金)FMあまがさきで商品開発PR



地元のラジオ局にあまっ子Farm部が出演しプロジェクトの経緯や進捗状況、新商品の紹介・PRを実施。

(まとめ)

地域伝統野菜活用プロジェクトに参加させて頂き、生徒達は、多くの経験を積み、学びを広げています。今は、商品化に向けて、準備を進めています。今後の展開がわくわくする取り組みとなっています。全校生にも学びを共有し、地域での支援体制を広げることが課題となります。

「身近な環境を活かし、主体的に取り組む子どもの育成」

滋賀県小学校教育研究会 環境教育部会長
滋賀県犬上郡多賀町立多賀小学校 校長 久保川 雅子

滋賀県では、平成28年に第3次滋賀県環境学習推進計画を策定し、環境教育の基本目標として「いのち」に共感して自ら行動できる人育てによる、持続可能な社会づくり」を掲げ、教育現場だけでなく、地域や各団体の資源や知恵等が『つながり』ながら活動していくことが重要であるとされている。学校現場における具体的な取組としては、「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」など全県で実施されている環境学習プログラム、また、琵琶湖の日の一斉清掃、教科学習の中でのゴミやリサイクル、エネルギーについての学習など多方面から展開している。県小学校教育研究会の環境教育部では、毎年事例研究会において現場での取組を発表し、交流している。今年度は、3年に1度の研究発表大会開催年にあたり、11月19日に本校にて開催した。

本校のある多賀町は、豊かな自然と文化、温かい地域性があり、大変恵まれた教育環境にある。本校に於いても、裏山を有しており、今年度は、4年生が多賀小自慢の裏山をフィールドにした環境教育に取り組んだ。植物や生き物、沸き水など自分の決めた課題について調べ学習を進め、自分の考えを加えてまとめ、発信する学習を行った。その中で、主体的に取り組む力や仲間と相談し、知恵を出し合いながら学習を深めていく力の育成を意識して取り組んだ。当日は、参観の先生方を前に自信を持って発表し、良い経験ができた。全体会での講演では、大滝山林組合の田中一則様に、森林の働きや我々の生活とのつながり等実演を交えて具体的にご教授いただいた。また、事例発表では、長浜市立びわ北小学校の取組の事例報告があった。地域の自然、人と実際にふれあい繋がることで、自然を身近に感じ、環境を大切にしていこうとする主体的な気持ちが育まれていくことが実感できる大会となった。

今後、研究紀要を発行することで、環境教育の推進を図っていきたい。



体育館での公開授業



持続可能な社会づくりのための環境教育の推進 —環境教育によって育む学力と環境保全意欲—

東京都小中学校環境教育研究会

1 主題設定の理由

新型コロナウイルスの世界的蔓延は、私たちの市民生活、経済活動、衛生概念を根底から覆す事態を引き起こしている。長期的な戦いは避けられず、終息の絵地図が描けない状況である。コロナ前後で、世界の在り様が変わらざるを得ないと言ってよい。

これまで東京都小中学校環境教育研究会は、人類の行き過ぎた社会活動が引き起こしてきた環境問題に警笛を鳴らし、持続可能な社会への改善を試みる教材化を進め、授業実践を重ねてきた。地球温暖化やフードロス、海洋プラスチック問題などである。これらに取り組む中で、私たちの実生活はどうであったろうか。うだるような暑い夏の日の午後、日々の給食や恵方巻等の残菜を目の前に抱えた傍、行楽で河川や海に出かけた楽しい折、私たちはその惨状に目を覆い、何とかしなければと奮い立ち、突き動かされ、見えざるものに使命として後押しされて研究を進めてきた。しかし、滔々とした日常生活の中で、時にそれは途切れることもあった。授業実践で子供たちと思いを一つにできたと実感し、幾ばくかでも使命を果たせた高揚感を得ることがあった時にも、地球規模の温暖化や残菜やペットボトルが大きく変化する筈もなかった。枯れ葉舞う季節になれば温暖化の意識は薄らぎ、日々の給食の完食に一喜一憂し、スポーツドリンクはペットボトルを手にはせざるを得なかった。地球や人類を脅かす環境問題は歴然として存在し、私たちもそれに関心を寄せてはいるが、季節や地域、時々でその体感や使命感に温度の幅があったことは否定できない。しかし、今世界を席卷しているコロナ禍は、これまでの事象とまったく趣を異にする。すなわち、私たちが生活する上で、避けることのできない連続した制約や制限、意識変革を生じさせていることである。季節や地域、時間に関係なくである。環境問題に関する私たちの関心や意識の逃げ場を封じる事態である。それはまるで、このままでは持続可能な社会はないと、地球環境が刃を向けているようでもある。

憂慮すべき現状に猶予はない。私たち東京都小中学校環境教育研究会は、持続可能な社会づくりに、教育は座しているだけではないとの意識をもち、その克服のための実践をもって、2100年を生きる子供たちへの持続可能な社会づくりというパラダイムシフトを進めていかななくてはならない。そしてその活動を教育界をはじめとして広く伝播し、世界中の同じ志を抱く方々と手を取り合い、進めていかななくてはならない。これまで本研究会が取り組んで

きたESDは、その実現を可能にする希望であり手段となりうると信じる。新しい環境教育(ESD)におけるねらいの設定、授業デザイン、指導方法などについてさらに広く深く確信をもって研究を進め、指導者側の意識転換と、児童・生徒の変容、日常生活の変革を図っていく決意である。

2 研究の方法

- (1) 役員定例会で理論構成を行う。
- (2) 本研究会で作成した「新しい環境教育」で示した児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、研究部において授業実践を行う。
- (3) 東京都小中学校環境教育研究会の研究発表校や外部機関と連携し、研究実践を深める。

3 研究の内容

《理論構成》

- (1) 環境教育やESDの優良事例を分析し、学校経営や授業の在り方について検討し、推進する。
- (2) 幼稚園・小学校・中学校の発達段階に応じた、学習活動のねらいや方法を研究する。

《実践研究》

- (1) 「新しい環境教育」の3つの能力・態度をもとにした実践を行う。
- (2) 環境教育やESDによる自己変容について研究を深める。児童・生徒が自らの思いや考えを明確に意識し、変容を捉えることができるよう、ポートフォリオやイメージマップ等を取り入れた学習方法とその評価方法に関する研究を深める。

令和2年度

全国・東京都小中学校環境教育研究会 活動計画

月	日	曜	開催会合	内 容
6	15~19		誌上総会	・役員、地区理事の確認 ・昨年度報告と今年度計画 ・名簿、紀要確認(メールにて確認)
7	8	水	役員会1	・研究テーマ検討 ・都(全国)大会要項確認[杉並十小]
8	4	火	研究員1	・今年度の研究について ・各校事例交流[多摩南鶴牧小]
8	5	水	役員会2	・都(全国)大会要項確認 ・都(全国)大会会場確認[杉並十小]
9	7	月	役員会3	・都(全国)大会計画 ・自然観察会確認[杉並十小]
9	10	木	研究員2	・研究経過検討 ・研究計画立案 ・情報交換[多摩南鶴牧小]
10	9	金	研究員3	・研究経過検討 ・研究計画立案 ・情報交換[多摩南鶴牧小]
10	13	火	役員会4	・都(全国)大会計画 ・自然観察会確認[オンライン]
10	31	土	自然観察会	・高尾山の植生と動植物
11	16	月	役員会5	・都(全国)大会確認[オンライン]
11	27	金	研究員4	・研究経過報告 ・研究成果確認[多摩南鶴]
12	10	木	役員会5	・都(全国)大会確認 ・全国大会紀要確認 ・案内発送[杉並十小]
12	18	金	役員会6	・全国大会オンライン中継会場確認
12	28	月	研究員5	・研究経過報告 ・研究成果まとめ[多摩南鶴牧小]
1	29	金	役員会7	・都(全国)大会最終確認[杉並十小]
2	19	金	研究員6	・研究成果まとめ ・プレゼン確認[多摩南鶴]
2	26	金	第52回全国小中学校環境教育研究発表大会	・兼第56回東京都小中学校環境教育研究大会[オンライン]
3	5	金	役員会8	・研究発表大会反省 ・今年度の研究のまとめ[杉並十小]
3	9	火	研究員7	・研究のまとめ ・次年度計画検討[多摩南鶴牧小]